

# 桐壺更衣の歌

上野辰義

## 一

光源氏の母桐壺更衣は、源氏物語に八百首近く書き留められている最初の和歌を、そしてその一首のみを詠み残して、この世を去っていた。その詠み残された状況はまことに凄絶といふべきだ。彼女は、しっかりとした後見のない更衣という身分で、時の帝桐壺の激しい寵愛を一身に集めたがために、後宮をはじめとする貴族社会の非難・恨みを負い、それに圧殺されるかのように衰弱して、里に退出するやいなや没した。その直前、天皇以外は死ぬことを許されぬ宮中を、やつとのこととで退出することがなかったのも、そのタブーの犯される危険性が強まり、さすがの帝も更衣の退出を認めざるを得なくなるほどに、更衣の容体が悪化してしまつたからである。その際、退出をなかなか許さぬ帝の必死の呼びかけに応えて、薄弱とした意識の中から、更衣は一首の歌を詠んだ。

(帝)「限りあらむ道にも、おくれ先だたじと契らせ給ひけるを、さりともうち捨ててはえ行きやらじ」とのたまはするを、女も、

「いといみじ」と見奉りて、  
(更衣)「限りとて別るゝ道の悲しきにかまほしきは命なりけり  
いとかく思う給へましかば」と息も絶えつゝ、聞こえまほしげなる事  
はありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、

(桐壺 二九頁)

この更衣の歌には、帝の詞中の「限り」「道」「行く」などの語を取り込み、また「行か・生か」の懸詞と「道」・「行か」の縁語を用い、その上で内容的にも帝の、更衣を引き止めようとする必死の呼びかけにこたえるという、幾つもの和歌的な技巧とマナーとが用いられている。「あるかなきかに消え入りつゝ物し給ふ」(二九頁)と言われる状態に陥っている更衣に、このように知的なそして自覚的な和歌的言語操作が可能かという素朴な疑問も当然起こるわけだが、これは既に言われているように、「当時の人々は幼少の時代からかやうな習練を積んであるのであるから、縁語・懸詞・比喩等も極めて自然に口を衝いて出た筈であつて」、こうした更衣の詠歌も、歴史的現実としてはなかなか困難な場合もあるであろうが、「当時としては必ずしも不自然

ではな」(森岡常夫『源氏物語の研究』三四四頁)いと言っておいてよいのであろう。(もつとも森岡博士はこれによって更衣の歌が形式一片のものでなくその根底に流れる詠嘆を汲み取らねばならぬものであることを説いておられる。)また、詠歌そのものよりは範圍が広がっているが、清水好子氏は、貴族の表徴たる物言いとして日常の言語生活における引歌・歌語の使用があり、その顕著な教育的実例が枕草子「宮にはじめて参りたるころ」・「積善寺供養」の段に、またその理想的なあり方が源氏物語に示されていると言われる。<sup>2)</sup> 実際、寺本直彦氏が、桐壺帝のことばと更衣の歌への影響を指摘されている、<sup>3)</sup> 次の村上天皇と中宮安子の贈答歌においても、

選子内親王うみたてまつらせ給はんとて出でさせ給うける時

贈太皇太后宮

逢ふことの限りのたびの別には死出の山路ぞ露けかるべき

いみじうむつからせ給うて、御返し

天曆御製

君のみや露けかるべき死出の山おくれじと思ふ我が袖をみよ

(新千載和歌集・哀傷)<sup>4)</sup>

と、桐壺巻のこの部分との語の一致・類似はさておき、そして桐壺巻ほどの和歌的修辭も凝らされてはいないが、選子内親王出産後に亡くなる安子中宮が、やはり死を自覚した中でも宮中を辞する際に歌を帝に詠じている(同じ歌が万代和歌集卷十五雜歌二にも、「選子内親王うみたてまつらせたまはむとて、いでさせたまふに、又えなんまありがたくもやとて」の詞書で載っており、新千載和歌集はこれから採歌したとみられる)。桐壺更衣も、源氏物語中でその死後に帝から、「か

うやうの折りは、御あそびなどせさせ給ひしに、心ことなる物の音をかき鳴らし、はかなく聞こえ出づる言の葉も、人よりは異なりしけはひかたちの、面影につと添ひて」(三二頁)と追慕されていたように、管弦と和歌にひいでていたと見られるから、安子以上の歌を詠むことも十分ありえたと思われる(「言の葉」は和歌そのものではないが、この語の和歌に関わる用例の存在と、ここでは管弦の「物の音」との対応から、ここの「言の葉」は、和歌や引歌・歌語などの和歌的言語表現を含むものと考えられる)。

だが、「われかの気色に」陥って「いとあはれと物を思ひしみながら、ことに出でて聞えや」(二九頁)ることのできずいた更衣が、「息も絶えつゝ」歌を詠んだのにはそれ相当の理由と動機があったはずだ。動機は、物語の記述によるならば、「限りあらむ道にも、おくれ先だたじと契らせ給ひけるを、……」のことはに集約される桐壺帝の更衣に対する思いを、更衣が、「いといみじと見奉」ったところに求められるであろう。

この「いみじ」については、例えば「(帝ヲ)悲しく見奉る也」(湖月抄)と更衣の心情を表す言葉ととるか、「過分なるとの心也」(万水一露)・「おいたわしいとお見上げして」(対訳源氏物語、佐成謙太郎)・「もったいないことに存じあげて」(源氏物語評釈、玉上琢弥)などと、先行する桐壺帝の発話内容や心情に対する評価を表すかという問題がある。このことは、井上博嗣氏が『いみじ』は事象が普通ならざることであることを示すことをその表面的顯在的意義としつつ、同

時にその表面的顯在的意義とまさに表裏一体的にししかも前者と等力的に『いみじ』の対象事象が文脈に於いてもちうる具体的意義（引用者注、例えば、「いみじき絵師」なら「立派な・上手な」、「源氏ガ」尽きせぬ御心の程を言ひつゞけ給ふ。「藤壺ハ」さすがにいみじと聞き給ふ」なら「重苦しい嬉しさ」を強く印象づけると云った具象的潛在的意義を併せもつものである）（中古の程度副詞、いみじくぐといいたくぐの場合）『女子大國文』55・56、昭和四四年十一月）と言われる、後者の「具象的潜在的意義」が文脈において様々に規定されてくるために、「いみじ」の示す内容が、客体的事物の情態から言語主体の情意にわたる広い領域に関与しうることによって来すると思われる。ともあれここでは、更衣は帝の自分に対する尋常ならざる様を前にして、例えば「これ程まで自分と離れまいと愛して下さるのかと思ふと、有難いとも嬉しいとも悲しいとも何とも言へなくて」（対訳源氏物語講話、島津久基）などというべき心情になって詠歌に至ったのだと思われる。そうした心情の揺れは、この場合と同じ「……を（いと）いみじと見る」という構造をもつ他の例を見ても確認できる。「……を（いと）いみじと見る」の形は、源氏物語にはこの一例しか見いだせず、他の平安時代の仮名作品にもそう多くは見いだせないのだが、蜻蛉日記と堤中納言物語に、

三月ばかり、こゝに（夫ガ）わたりたるほどにしも苦しがりそめて、いとわりなう苦しと思ひまどふを、いといみじとみる。

みな君たちもあさましう、「さいなんあるわたりに、こよなくも

（蜻蛉日記上巻・康保三年三月）

あるかな」と思ひて、此人（||大納言ノ姫君）を思ひて、いみじと君は見給ふ（堤中納言物語・虫めづる姫君）

とあり、いづれも対象の事態の予想外のさまや尋常ならざるさまと関わり用いられたながら、このあと必死に夫の看病をする道綱母のさまや、姫君に歌を贈る男の行動が記されており、「（いと）いみじ」と見る主体の、その事態に誘発された強い心情の揺れがうかがえる。

ところで我々はここで、帝を「いといみじと見奉」った更衣が、「女も」と語り手から呼ばれていることに注意しなければならない。さすがに天皇である桐壺を「女」に対する「男」とは表面きつてよびえなかったが、更衣が「女」とよばれたことによって、少なくともこの時点において更衣は、天皇―更衣という主従関係を脱して、更衣に對し激越な執着を示す天皇に對して一人の「女」として對しうる機縁を与えられた。そして、「も」とあることによって、「男（||帝）も（女ヲ）いといみじと見」たということと、その心情、すなわち完全には同一のものと言えないが、帝が帝の言葉に返事すらもできぬ瀕死の状態に陥っている更衣を目にして発した「限りあらむ道にも……」以下の発言に示された、死ぬも生きるも一緒いつまでも一緒と契つたのにいくら何でもここで私を捨てていけないだろう、という帝の感亂を中核としたものを、更衣も、「女もいといみじと（帝ヲ）見奉」っていたのであるということが知られる。こうした事態と心情とに揺すられながら、更衣はここで「女」とよばれることで天皇―更衣という主従関係を脱する機縁を得、自己を恋の場における女に変換することによって、男女の媒ちである和歌を用い自己の心情を、實質的に「男」た

る桐壺帝に対して伝えうる条件を整えることができた。臣下である更衣は歌のことばの世界の回路に入りこむことによって、主君である桐壺帝に対し自己を解放することが可能となったのであると思われる。<sup>(8)</sup>

このような動機と理由の一端によって発せられた歌のことばを用いて、更衣は、帝の詞に応じて自己のどのような心情を帝に伝えようとし、そのためにどのような和歌的、そして言語的操作を瞬時のうちに積み重ねていったのであろうか。この歌は、現在一般に、「寿命の限りとしてお別れして行く死出の道が悲しいのにつけて、生きたいのは命であったことです、死出の道に行きたいのではなくて。」(新日本古典文学大系本)などと口語訳されている。おおよそはそれでよいのであるが、そう口語訳されてしまうことで文字面の表層からは失われてしまふところの、更衣の判断と操作を、以下不十分なが追体験することで、この更衣の歌を我々の内部に少しでも生き返らせることができたと思う。

## 二

更衣の歌は「限りとして別るゝ道」ということばでも始まる。これは桐壺帝の詞中の「限りあらむ道」を受けてそれと対応しているとおいてよい。しかし、この帝の発した「限りあらむ道」という言い方は源氏物語に他に見えない。他の作品では今のところ源氏物語より以後の千載和歌集・離別の上西門院兵衛の歌「限りあらむ道こそあらめこの世にて別るべしとは思はざりしを」(もと久安百首離別・詠進歌)の例しか見いだせていないが、兵衛の歌の「限りあらむ道」は、「この

世にて別る」が生別に関わるのに対して、死出の道を指している。この桐壺帝の詞でも、兵衛の歌と同様、「ざりとも、うち捨ててはえ行きやらじ」の部分が生別に関わるのに対して「限りあらむ道にも、おくれ先だたじと契らせ給ひけるを」は死別に関わっており、諸注に言うごとく「限りあらむ道」が死出の道を意味していると解してよい。

だが、源氏物語では、死出の道を表すのに「限りあらむ道」よりも「限りある道」という言い方を用いるのがより一般的である(この桐壺帝の「限りあらむ道」の部分も、源氏物語大成校異篇によれば、別本の国冬本には「限りある道」とある)。「限りある道」という言い方は、源氏物語に六例見いだせるが、それらは、期間の限定された旅・別れを指す一例(須磨二二頁)をのぞいて、他はいずれも「限りあらむ道」と同様に死出の道を意味している。二、三示す。

(先例ヲ破ッテ伊勢ニモ同行シタ母ノ六条御息所ガ亡クナリ、斎宮ハ)限りある道にてはたぐひ聞え給はずなりにしを、ひる世なう、思し嘆きたり。(濤標)

ただ限りある道の別れのみこそ、うしろめたけれ。命ぞ知らぬ。

(初音)  
(父八宮ニ)いかでかは後れじと泣き沈み給へど、限りある道なりければ、なにのかひなし。(椎本)

これらの殆どは既に近親者が他界している状況のものだが、初音巻の例は桐壺巻の例と同様一般的な死出の道を表しているものなので、「む」の有無による用法上の明確な差異を見いだしがたい。従って、「限りある道」と「限りあらむ道」との差は、「む」を用いず断定的に

言っているか、「む」を加えて推量的に表現しているかという意義面にあることになる。帝は、更衣が「日々に重り給ひて、ただ五六日のほどに、いと弱うな」り、「あるかなきかに消え入」る状態に陥つてその死が十分予想されるなかで、後者の「限りあらむ道」という表現を選ばず、死別に関して少しでも断定的な判断を避けたのだと見られる。

しかし、更衣は、この帝の「限りあらむ道」という言い方を「限り」として別るゝ道」と言い換えた。それは何故なのか。実はこの「限り」として別るゝ道」という言い方も、帝の詞中の「限りあらむ道」以上に、他に用例を見いだしにくい。この桐壺巻の例を除いて源氏物語にもまた中古の主要な仮名作品にも見られない。のみならず、和歌集においても八代集、および『新編国歌大観』の索引による範囲では中古の他の和歌集にも同様に見いだせない。従つて「限り」として別るゝ道」という言い方は、現状ではひとまず桐壺巻のこの箇所における更衣の個人的な言葉遣いに由来していると考えておいてよい。この「限り」として別るゝ道」の意味については、前掲のごとく現在の一般的な注釈においてもそうであるが、この語句に注がつけられて以降、死別と関わり合せるのが通常である。これは、「限り」として」という語句が、寿命の限界や人生の最期に際して、また「別る・別れ」が死別に際して用いられていることから誤りではない。しかし、文脈の展開を見ると、帝は里に下がるうとする更衣に対して「限りあらむ道にも、おくれ先だたじと契らせ給ひけるを、さりととも、うち捨ててはえ行きやらじ」の言葉が発して、その直前の地の文に「(更衣ノ退出ヲ)さらにな許させ給はず」とあったのと同じく、更衣の退出をひきとめようとしていた。更

衣の歌の「限り」として別るゝ道」も、帝の詞の主旨を表す「さりととも、うち捨てては(私ヲオイテ一人デハ里ヘ)え行きやらじ」の部分を受けて、更衣の退出を許さず更衣を宮中に引き留めようとする帝の気持ち・行動に、更衣が応えようとしても、天皇以外は宮中で死ぬことを許されないという掟の中で、衰弱しきつて死をも予想される自分にはもうそれが不可能、宮中に滞在することはこれが限界・最後と認識して、やむをえず赴かねばならぬ更衣の里への道、と解することもできるように思う。つまり生別に関わるととるのである。このことは、「限り」として「別る」という言葉の用法とも矛盾しない。「別る・別れ」は死別以外の生別でも用いられるし(例えば、桐壺三〇頁・帚木八六頁)、「限り」としての語句も、臨終以外に、男女の仲・人の心情や行為の終局(例えば、梅枝一七〇頁)、あるいは源氏物語以外の作品では四季の変わり目に際しても用いられ(例えば、千里集二九番歌・一条撰政御集七二番歌)、またその内部構造として予想される「限り(デアル)と」「α」と「α」を断定の助動詞と見るときは「(デアル)」「は不要。また「α」としては、一般に「思ふ」「言ふ」「す」などの連用形が想定されている<sup>10)</sup>という形式から、言語主体による判断や認識作用の存在が窺われて、結局「限り」としての語句は、物事の限界・最後と(判断シ・思フ・シ・トイフ状態ニ)て、というような意味で、死別に際して以外でも様々な状況下で用いられるものなのだと考えられるからである。

つまり、「限り」として別るゝ道」という語句は、帝の詞の「限りあらむ道」との対応や「いかまほしきは命なりけり」という下句への展開

からは、この別れが帝との今生での最後の別れとなるという死出の道のことを主要には意味しながらも、直前に位置する帝の発話の主旨との線条的関連からは、帝が引き留めても、また更衣がそれに応えようとしてももうかなわずに別れるしかない里への道の意をも懸けて匂わしていることになる。渡辺実先生は源氏物語の引き歌表現において、桐壺巻の輓負命婦が更衣の里を訪問する段の「やみにくれて伏し沈み給へるほどに」「月かげばかりぞ、やへむぐらにも障らずさし入りたる」などの箇所を例示して、「言葉が二重の意味にはたらくことになる場合が多い」ことを指摘されているが、それと類似した、和歌の技巧としての固定した懸詞ではない即興的な、あるいは幾分散文的な懸詞様の表現として、この「限り」とて別る「道」を見ておくことができるように思う。

こうして、桐壺更衣は、自らの歌を「限り」とて別る「道」の語句ではじめることによって、帝の意向に沿って宮中に留まることの不可能なことと、この別れが、帝が「む」を用いて推量的に扱っていたところの死別につながるものであることを、一度に併せ述べてしまった。この語句の例が他に見いだしたがたく、更衣のこの場における個人的な物言いとみなされたことの真の理由はここにあると思われる。

三

このようにして歌を詠み始めた更衣は、その両義を託した「限り」とて別る「道」が「悲し」と表出する。この「悲し」が、和歌において生別にも死別にも用いられるものであることは先にも触れた。本稿

に以下引用されるであろう別れの歌にも見いだされるごとくである。

これに続く「に」は、上句にみられる「限り」とて別る「道の悲しき」という文相当の単位と、同じく文相当の下句「いかまほしきは命なりけり」とを接続している助詞である。このような「に」は多くの場合、それが承接する上の活用語の連体形との間に、「程・時・故・の」などの形式名詞・準体助詞を補って理解することが可能で、こうした「に」が一般に言われるごとく格助詞から転成してきたものであろうことを思わせるが、このため、山口堯二氏が言われるごとく、「に」の機能は、「前句の事態が後句の事態の存在・成立する場面にあたる」という意味関係〔場面性〕を基本的に示すものであると考えることができる（『古代接続法の研究』第十章）。しかし、同氏をはじめ先学が指摘されるように、<sup>(10)</sup> 実際は、この基本的な意味関係のみならず、文脈に依存する形で、継続・添加・理由・逆接などの種々の意味関係を前句と後句の間に認めることが可能である。更衣の歌の場合でみるなら、

（前句）限りとて別る「道の悲しき

という状況（場面）において、

（後句）生かまほしきは命なりけり

という思い（認識）が発生してきているのだが、ここには当然、前句から後句への時間的継起性も認められるし、帝の心情に背いて別れていくのが悲しいという前句の気持ちだが、それゆえ、別れが悲しいから行きたいのは里への道と死出の道ではなく、生きてほしいのはこの命なのだ、という後句の認識を導き出しているという因果性も認められる。さらに、山口氏の整理に従えば、後句では、「生かまほしき」

という、あつらえ（もしくは希望）へ主体的な志向〉が示されているから、前句はその志向の根拠を示すという意味での志向性も認められる。

こうして更衣の歌では、「場面性」の関係表示を基本に「多様な意味関係を担える反面、その関係表示には控え目な形式であるといえ」（山口氏前掲書一七四頁）る「に」を上句と下句との間に置いたことで、「限りとて」と同様、複数の意味合いを上句と下句との間に醸し出すことができているのである。

ところで、後句の意味を、別れが悲しいから行きたいのは里への道と死出の道ではなく、生きてほしいのはこの命なのだった、と述べたが、それに関わって下句の表現で注意すべきことがある。まず、下句「生かまほしきは命なりけり」には、「AはBなりけり」という文の構造が見いだせることである。これは「AはBなり」という形の判断文において、その判断自体を「詠嘆的に認識したことを示す表現『けり』」（糸井通浩「貫之の文章―仮名文の構想と『なりけり』表現」『王朝―遠藤嘉基博士古稀記念論叢』昭和四九年五月）が下接したものだとい言っておいてよい。この「詠嘆」の性格は、「過去に於て認識の外にあつた事実を、新に認識して驚嘆」（松尾捨治郎『国語法論攷追補版』六五四頁）したり、「経験を通して『今にして思えばこういうこと（もの、わけ）だったのだ』と納得」（竹内美智子「助動詞（一）」『岩波講座日本語7』七九頁）したりする「けり」自体の働きに由来するものとみておける。更衣の歌も、ここで「けり」が用いられているということは、上句「限りとて別るゝ道の悲しきに」で示さ

れた場面、すなわち、この世の別れとなることを予感しつつ、更衣の退出を必死に引きとめようとする帝の行動と心情を「いとみじ」と押しながらも、それに応えられず、これが限界・最後と観じて帝との別れを迎えねばならないという状況下で初めて、更衣が、下句「生かまほしきは命なりけり」の認識、すなわち、別れたくない生きたいのだったと今はっきり自覚し気づいたことよ、との意味を表しているのだと考えられる。つまり、この「……に……なりけり」の表現によれば、更衣は、死が確定的なものとして認識されたこの帝との別れに臨んで今初めて心底から生きたいという思いの存在を自覚したということになる。ということは、逆にいうとそれまでは生きたいと少なくとも積極的には意識していなかった、ということになる。

このことは物語の記述とも矛盾しない。更衣はそれまで物語に直接自身が顔をみせることなく、語り手や帝などの口や目を通してその様子が語られ捉えられてきたのだが、そこでの更衣の心中の記述は、「いとほしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたくひなきを頼みにてまじらひ給ふ」（二五頁）・「かしこき御かげをば頼み聞えながら、おとしめ、きずを求め給ふ人は多く、わが身はかよわく、ものはかなきありさまにて、なか／＼なるもの思ひをぞし給ふ」・「事にふれて、かず知らず苦しき事のみまされば、いといたう思ひわびたるを」（二七頁）とあるばかりだったからである。父の故大納言が生前母北の方に「たゞこの人の宮つかへの本意必ずとげさせ奉れ」と繰り返し言い置いていたが、この本意が父でなく、どれだけ更衣自身の意志となっていたかはいまだ明確にしがたいし、仮に更衣が積極的に宮

仕えを望んでいたとしても、宮仕え以後の更衣の心中に触れた記述は以上のごときものである。ともあれ、更衣のこの歌には、帝寵を競う後宮のあまたの女御や更衣の嫉妬や恨みに、それまで押し潰されそうになっていた桐壺更衣が、死によって帝との再会が永久にとざされる別れに臨み、今初めて心底から生きたいと自覚した気持ちで詠みあげられている。(近年、桐壺更衣をかよわい女一点張りではなく、嫉視にも耐えて宮仕えを続け父の遺言を体現しようとした芯の強い女、さらには後宮中を敵にまわして帝寵を独占したたかな女として把握する見方が提出されている<sup>13</sup>)。この見方と、更衣の歌から窺える以上のような心情とは齟齬する側面をもつ。更衣の歌の内容を、帝の詞の手前、偽造された歌の上での形式的なものと思えば話は別になるが、そう見ることは、「……に(上句)……なりけり(下句)」の文型の採用からやはりむずかしいように思う。

また、下句にみえる「いかまほしき」には、以下の「命なりけり」との関係から「生かまほしき」が懸けられていて、それを「生きてほしいのは」とあつらえの意味に解した。しかし、問題は単純ではない。まず下句に「命生く」という言い方が表現の基底として存在しているからである。この「命生く(生くは四段活用、後には上二段活用)」という言い方は、「命死ぬ」と対応する言い方で、ともに上代から存在が認められ、それぞれの格関係は基本的には「主語・述語」の関係であると考えられる。ただ、今昔物語集以後の作品には、「生く」が同じ四段・上二段活用でありながら、「命を生く」という形で他動詞的な様相を示す例も「汝ハ、其ノ童ヲ質ニ取タルハ我が命ヲ生カト思フ故カ、

亦、只童ヲ殺サト思フカ」(今昔物語集卷二五―二二)と一方で見られるのだが、にもかかわらず、(a)「命を生く」の形が今昔物語集以前に見いだせない、(b)「命生く」と対応する「命死ぬ」が今昔物語集までは用例が見いだされる(卷三―二二)、(c)今昔物語集以後も、従属句という条件下で「今日我が命ノ生ル事ハ鹿ノ御徳也」(今昔物語集卷五―一八)・「男、命のいきぬることをよろこびて」(宇治拾遺物語卷七―一)・「千一モ命ノ生ズル事」(太平記卷一・頼員回忠事)と「命」が主格であることの明確な例が存在する、(d)更衣の歌の「生かまほしきは命なりけり」には「を」が用いられていない、などの事情から、更衣のこの歌の「命生く」の格関係も、やはり「主語・述語」であったと考えておいてよい<sup>14</sup>。また、「生かまほしき」の「まほし」は、最も一般的な用法として一人称者の希望や、言い切り以外の形においては二人称・三人称者を主体とする願望を表すが、他者に動作を希望するあつらえを表す用法も「あらまほし」の形で事物・状態の存在を願う場合を別にすると、中古には一例の報告しかないが、認めておけるようだ<sup>15</sup>。

花と言はど、かくこそ句はまほしけれな。(源氏物語若菜上)

そのため、更衣の歌の「生かまほしき」における「まほし」の意味とその主体を考えると、①「命」自身が「生く」ことを願う、②私(更衣)が「命」に「生く」ことをあつらえる、の二通りを想定することが可能である。しかし、①の場合、当時「命」という語は、上代から中古までの用例をみると、「命」は神の支配するものだという觀念がみいだされ<sup>16</sup>(万葉集卷九・一八〇四、同卷十一・二四一六、拾遺和歌



集神楽歌・五九六）、人の意志で可能なことはせいぜい人の命を「弑す・救ふ・許す」、また自らの命を「捨つ・残す・継ぐ・願ふ・待つ・知る・延ぶ（他動詞）・譲る・掛く・頼む・―ニ換ふ」ことぐらいで、いずれも「命」の存在を抹殺したり、存在している命をそのままにしておいたりすることはできても、終息しそうな命を回復させるなどのことはできず、不如意な存在である命に対する限定的な範囲での意志的動作ばかりで（「延ぶ・譲る・―ニ換ふ」も比喩または願望的動作である）、「命」みずからも「生く・死ぬ・絶ゆ・過ぐ・経・延ぶ（自動詞）」などの動作をなすにすぎない。しかもこれらの『命』―自動詞の例では「む」など推量の助動詞が下接しても、今昔物語集以後にみえる「命を生く」を除けば、意志を表すと解する余地のある例が見られないので、『命』―自動詞の動作も（神の支配するものとしての「命」の）無意志的なものであったと思われる。従って、今の更衣の歌の場合も、「命」みずからが意志を持って「生かまほしき」と願望していると解する根拠は弱い。また当時の用例において、この更衣の歌と同様、「行く」と掛けられた「いかばや」「いかむ」「いかまほし」の意志・希望の主体は「命」の所有者である人間であるのが一般であることも参考になる。

又、をとこ

風吹けばとまらぬつゆの命もていかむと思ふことのはかなさ

（伊勢集）

女をうらみてさらにまうでこじとちかひてのちにつかはしける

桐壺更衣の歌

何せむに命をかけて誓ひけむいかばやと思ふ時もありけり

（拾遺和歌集恋四・実方）

都にも恋ひしき人のおほかれば猶このたびはいかむとぞ思ふ

（後拾遺和歌集恋三・惟規）

つくしへくだる人へ

をしからぬ命なれどももろともにかまほしきはいきの松ぼら

（弁乳母集）

よって、①の理解は全く不可能とは断定できないが、蓋然性は低い。

②は、あつらえの「まほし」の用例の少ないことが気になるが、「あらまほし」の形ではそれが一般化していること、同じ源氏物語にあつらえと解せる「まほし」の例が存在すること、更衣自身が悲しく思っている「限り」と別かるる道の悲しきに「という上句の展開から、それに直ちに続く「生かまほしき」の主体が更衣であると解するのは自然であること等から、②と解することの方が①よりは妥当かと思われる。

ちなみに、今昔物語集以後の作品に見られる「命を生く（生くは四段活用、後には上二段活用）」という形を、今の場合にあえて想定して「生く」を他動詞の様相においてとらえ、「生かまほしきは命なりけり」を、③私（更衣）が命を生かしたく思う、と理解すること、加えて「命」を寿命の意味にとり、想定した「を」を「夜を寝む」「長道を恋ひ来」「宿を立ち出づ」などと言う時の、動作の行われる時や場所を示すものと解し、同じく④「自己の寿命を生きる」ととることも、先の（d）の事情やこう解すべき「命を生く」の明確な例が見いだせないことから、やはり困難であるが完全には否定できない。また、

「命生く」を、「命」の存在を明示して「生く」の語を強調したものと考へて、⑤源氏物語のこの「生かまほしきは命なりけり」の「命」も同様に「生かまほしき」を強調している語と解することも全く不可能とは断言できない。

こうして現状では、②と解しておくのが最も妥当かと思われるが、それ以外である可能性を明確に否定し難い要素も少なからず残る。この不明瞭さには、更衣が、下句「……は『命』なりけり」の文型の題目「いかまほしき」に、上句からの展開で「命生く」とは格関係の異なる「(私ガ)行かまほしき(道)」の意を懸けたことも関係していると思われる。ともあれ②において、不随意的な命に生キテホシイとあつらえているのは更衣自身であるし、③④⑤の場合でも、命ヲ生カシテイ・生キタイと希望しているのは更衣自身である。命ガ生キタガッテイルとする①の場合でも、その結果生き延びるのはそうした「命」の意向を察して歌に詠んだ更衣自身であるから、更衣自身もその結果を是として受け入れる態度であると見るのが自然な理解である。逆に言えば更衣自身の生き延びたい意向を、「命」に代弁させているわけであるから、いづれにしても更衣は生きたく思っていることになる。こうして更衣には、帝との死を認識した別れに臨んで生への執着がめばえた。

#### 四

桐壺更衣の歌のもつ、以上のような重層的、かつ一途にして不明瞭でもある姿は、帝との別れというこの場面の個別的な状況に規制され

つつ、桐壺更衣という具体的な存在によって詠出されたところの一回的なものといえようが、かといって当時の和歌の表現のあり方と全く無縁の所に存在しているわけでもない。例えば、八代集を中心にして別れを詠んだ歌をながめてみると、この世での別れ「生別」を扱う「離別・別」の歌では、命・寿命が安定していれば将来の再会(「逢ふ」こと、後拾遺和歌集以降は「逢ふ」ために「待つ」ことが目立つようになる)も期待されこの度の生き別れも悲しくはない、という想を土台として、その命が不定だからいつ再会できるかおぼつかない、という命の口惜しさや別れの不安、また命・寿命に自信がもてないので将来の再会はかなわず、この別れが今生の別れになるかもしれない、という死別を見通した悲しみなどの詠まれている歌を見いだせる。

命だに心にかなふ物ならばなにか別の悲しからまし

(古今和歌集・しるめ)

別れてはいつあひみんと思ふらん限あるよの命ともなし

(後撰和歌集離別・伊勢)

別れてはあはむあはじぞ定なきこのゆふぐれや限なるらん

(拾遺和歌集別・よみ人しらす)

ゆくすゑの命もしらぬ別ちはけふ相坂やかぎりなるらん

(拾遺和歌集別・よしのぶ)

別れよりまさりてをしき命かなきみに二たびあはむと思へば

(千載和歌集・藤原公任)

別ちはこれやかぎりのたびならむ更にいづくべき心ちこそせね

(新古今和歌集離別・道命法師)

人はいさわが身はすゑになりぬればまたあふさかをいかが待つべき  
き  
(金葉和歌集・藤原実綱)

さりともと猶あふ事も頼むかなしでの山ぢをこえぬ別は

(新古今和歌集・西行)

桐壺更衣の「限りとて別るゝ道の……」の歌にも、このような「離別・別」の歌のもつ想、即ち今回の「別れ」が即今生の「限り」最後である《死別につながる》という想が通底していることは言うまでもない。これらの「離別・別」の歌に、「限り」「別る・別れ」「道・路」「行く・生く」など、更衣の歌と共通する語が多いのも、こうした想的共通性に対応する事実なのであろう。

しかし、更衣の「限りとて……」の歌は以上のごとき「離別・別」の歌とは決定的に異なる質も同時にもっている。というのは、どちらも同様に将来の死別の訪れを見通していても、「離別・別」の歌では例示したごとく、命が安定していれば再会も期待できると仮定したり、あるいはその「命」の頼りなさを嘆いたり、またそのような「命」の維持を再会まで期待したりと、その死別をいまだ切迫していないものとしてとらえ、あるいは「限りなるらん」「限りの旅ならむ」(また「思ふらん」とあるごとく、この別れが今生の別れ・死別となるであろうとしながらも、それをいまだ推量されるべき将来のものとして扱っていたのだが、これに対して、更衣の歌では、「限りとて(別るゝ)」という語句を用いることによって、帝との死別をそうした切迫していない将来のものとしてでなく、まもなく現実となるはずの確定的のものとして認識し歌にしていたからである。このように、死別をまもなく

く現実となるはずの確定的のものとして認識し歌に詠みこむのは、「離別・別」歌でなく、この世との別れ「死別」の心情を詠んだ「哀傷」(後には出家・無常に関わる歌も扱う)歌に属する。いま、更衣の詠のように死にゆく立場の者の歌(いわゆる「辞世」とそれに近いもの)を、機械的に桐壺更衣の「限りとて……」の歌を構成する主要な語「限り」「別る・別れ」「道・路」「行く・生く」等に類することばを一首のうちに幾つか用いているものに限って示すと、第一章に既掲の新千載和歌集哀傷に載る安子中宮の「逢ふことのかぎりのたびの別には……」の歌と、その他には、

かりそめのゆきかひぢとぞ思ひこし今はかぎりのかどでなりけり

(古今和歌集・哀傷在原滋春)

しる人もなきわかれぢにいまはとて心ほそくもいそぎたつか

(後拾遺和歌集哀傷・定子皇后)

くやしくぞ後にあはむと契りけるけふをかぎりと言はましものを  
などが拾えるくらいだが、これらの歌においても更衣の歌と同様に自分の死が確定的なものとして自覚されている。ただ、これらをもて知られるように、死にゆく者の悲しみが大方はうたわれているものの、類型となるような種の歌の想を見だしにくく、これ以外の「辞世」一般をみても、その内容は世の無常や残る者への思いなどがめだつものの、更衣の歌がそうであったように、具体的には死にゆく者の置かれた状況や感慨によってその内容はさまざまである。

つゆをなどあだなる物と思ひけむわが身も草におかぬばかりを

(古今和歌集哀傷・藤原これもと)

つゐにゆく道とはかねてきゝしかどきのふ今日とは思はざりしを

(古今和歌集哀傷・業平)

いも山のいはねにおける我をかもしらずて妹が待ちつつあらん

(拾遺和歌集哀傷・人まろ)

手に結ぶ水にやどれる月影のあるかなきかの世にこそありけれ

(拾遺和歌集哀傷・貫之)

夜もすがら契りしことを忘れずは恋ひむなみだの色ぞゆかしき

(後拾遺和歌集哀傷・定子皇后)

煙りとも雲ともならぬ身なりとも草葉の露をそれと眺めよ

(栄花物語鳥辺野・定子皇后)

秋かぜの露のやどりに君をおきてちりをいでぬることぞかなしき

(新古今和歌集哀傷・一条天皇)

つねよりもむつまじきかなほととぎす死出の山ちのともとおもへ

(千載和歌集哀傷・鳥羽院)

従って、「哀傷」歌としての更衣の歌の内容的特徴は、以上のごと

き歌どもとの対比によって捉えられてくる。何点かある。ひとつは、同じく死出の道を指すにしても他の「限りある道」「限りある別れ」

「限りのかどで」「逢ふことの限りの旅の別れ」「別れぢ」「つゐにゆく道」などの言い方が、それを客体的な概念として提示しているのに対

して、「限りとて別るゝ道」では、前述のように「限りとて」という語句に、「限り(デアル)と「α」て」という内部構造が想定される

ために、特に「……とて別るゝ」の部分に、更衣の自己の死を認識す

る主体的な判断の作動が確認され、その結果、他歌に見られる言い方

以上に死に赴くことに対する更衣の感情の揺曳が窺われることである。その感情の揺曳とは、「限りとて」の語義を考えるなら、今の場

合、更衣が帝の心情に依えて帝とともに宮中に留まりそしてこの世にも留まりたいと望んでも、それがもうどうにもかなわぬ限界にきた、

最後が近づいたということを認識した状況下における、自己の意志に

反して帝と彼此兩岸に別れねばならぬ無念さとか口惜しさとかである。そうであるならば、そうした思いが伏流となつてこそ「限りとて

別るゝ」死出の道が「悲しきに」と場面設定され、そのもとで「いかまほしきは命なりけり」という自覚が勃然と生じたのも当然と言え

る。なお、後拾遺和歌集哀傷・定子皇后の歌にみえる「今はとて」とい

う語句にも、「限りとて」と類比的に「今は(xデアル)と「α」て」という意味構造が想定され、また「いまは」が「限りと」に続く場合

も一般に多く見られ、

いまはかぎりともみ給に、

(源氏物語真木柱)

住みわびぬ今はかぎりとも山里に身をかくすべき宿求めてむ

それが、

いまはとて燃えむけぶりもむすほほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ

(源氏物語柏木)

いまはとてとびわかるめるむらどりのふるすにひとりながむべき

かな

(後拾遺和歌集哀傷・義孝)

「今はとて」自体は「今は」を顯示して、その「x」には、「限り」の存在が想定されることはありえても他の語でもある可能性を含めつつ、「x」そのものの実態はあくまでも顕在化されない。つまり意味の比重はどこまでも顯示されている「いまは」という語句の表す、以下に示される或る行動を起こす時点の現在性・当時性の表示にあると考えられ、「限りとて」が、限度・限界、ならびにそれによる物事の最後の認識に重点があるのとは異なる。よって「限りとて」と同様、「今はとて」にも主體的判断や感慨の存在が窺えるものの、「限りとて」とは、当然のことながら意味も余情も異なる。そこから惹きおこされる感慨も、例えば更衣の歌における「限りとて(別るゝ)」が口惜しさ・無念さを感じさせるなら、定子皇后の歌の「(しる人もなきわかれぢに)いまはとて(心ほそくも)いそぎたつ」は定子の死への悟り・諦観性・潔さを印象づける。

さらにまた、指摘できる更衣の歌の特徴は、死に臨んで生への執着を表白していることである。実はこうした類の歌は多くない。先の「哀傷」歌どもを見ても、訪れくる自己の死を静かに受容する姿勢を示すものが殆どで、せいぜい「きのふ今日とは」と驚き嘆くぐらいであるし、前章に挙げた「行く」と「生く」を懸けた歌どもをみても死に反逆して生きる志向を示しているのは、「恋」や「離別」のものばかりである。紫式部の兄弟藤原惟規の「都にも恋しき人の多かれば……」の歌も、後拾遺和歌集の詞書「父のもとに越の国には、べるときおもくわづらひて京にはべりける齋院の中將が許につかはしける」や、俊頼

髓脳・今昔物語集(巻三一―二八)などの記載によれば、まさに臨終

の歌であり、生への執着も強く示されているのだが、後拾遺和歌集がこの惟規の歌を、この歌の直前に置かれた和泉式部の、「こち例ならずはべりけるころ人のもとにつかはしける」の詞書をもつ「あらざらんこの世のほかの思ひいでにいまひとたびの逢ふこともがな」の歌とともに恋部に収めているように、死の認識よりも恋しい人に逢いたいという恋心の強さの方が目立ち、「女」とよばれた更衣の「限りとて……」の歌が、帝との恋の情を含み込みながらも、死出の道と「命生かまほしき」情との対比を明確にしているのとは差がある。

また、次に挙げて比較しておくべきは、竹取物語のかぐや姫昇天の場面においてかぐや姫の詠んだ、

今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひいでける

の歌であろう。竹取物語のこの場面と、源氏物語桐壺巻の更衣と帝との別れの場面とは、共通する表現が多く見られ注意されるが、かぐや姫のこの歌も、地上の世界を去る際に(「辞世」)帝に対して詠み残されたという点で更衣の歌と通じるし、他にも、「限りとて」「今はとて」の相似たことばで詠み始められていること、天の羽衣を着る折りに(上句―状況・場面)、帝をあわれと思ひ出した(下句―気づき・認識)という一首の大枠の構造等でもよく似ている。しかし、「限りとて」が物事の限界・最後の認識に重点を置き、「今はとて」が或る行動を起こす時点の現在性・当時性の表示に重点を置いたために、それらは先に見たように意義もその醸し出す余情も異なり、後者は前者ほど情動的でなかったし、「……をりぞ」は羽衣を着る時点のみを強調

するばかりで、更衣の歌の「……に」が多様な意味合いを担いえていたのとは異質である。また、かぐや姫は帝を慕わしいと思いついても、桐壺更衣ほど帝を含めたこの世・地上世界への執着・志向性を示さない。つまり更衣の歌の方がはるかに多義的で感情的なのである。

こうして、桐壺更衣の歌は、あくまでも多義的で情的で志向的であった。「限りとて別るゝ道(の)」「(悲しき)に」という懸詞的な、そして情念の揺れを感じさせる物言いであり、「(悲しき)に」という関係表示には控え目であるがために多様な意味関係を担える形式を繋ぎに用い、「(行・生) かまほしきは」という懸詞と、その懸詞の使用ゆえにあえて格関係と意味とにおける不明瞭さ・多義性を生じさせる危険を冒しながらも、「命なりけり」という気づき・詠嘆の表現で生への執着をうたいあげて終わっていた。このように多様で豊饒な内容を、更衣がわずか三一文字に簡め得たのも、このことの葉が和歌であったからにほかならない。帝の行動と心情を「いとみじ」と見た「女」が、それまでのしじまを破って、息も絶えだえの死の床からやつの氣力を振り絞って歌を詠んだのも、歌のこの力に頼ったからに違いない。我々はこのこに、帝の会話の言葉が、更衣の歌のこの葉へと変換されるさらなる理由を見いだす。

しかし、にもかかわらず、この場面で、歌ははまだ完璧な力を持ちえていない。更衣の死に臨んでの全ての思いは三一文字に封じ込めえなかった。更衣はこの後も、「いとかく思ふ給へましかば……」と会話の言葉を続けていかざるをえないのである。そこには思いの質の変

化を予想させつつ、歌の力の限界と、更衣の死に臨んで抱く思いの重さとが対峙している。桐壺更衣の歌にまつわる問題は、依然として未解決のまま残される。

## 注

- (1) 源氏物語の本文の引用は、角川文庫本『源氏物語』による。以下同じ。ただし、句読点などの記号をそのまま改めたり、『源氏物語大成校異篇』を参照して本文を訂したりした箇所がある。
- (2) 清水好子「源氏物語と歌―作中人物の言葉―」『文学』昭和五十八年三月。
- (3) 寺本直彦『源氏物語受容史論考続編』三五頁。
- (4) 以下、和歌集の引用は『新編国歌大観』に、他の文学作品の引用は日本古典文学大系本による。なお、本文の訓みに問題を生じない範囲で漢字をあてるなど、ままた記を私に変えたところがある。
- (5) 「言の葉」の和歌に関わる用例には、古今集仮名序に、「やまとうたは人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける」があり、源氏物語にも、夕霧巻に、「女郎花しをるゝ野辺をいづことてひと夜ばかりの宿をかりけむ」の歌に重心のある文を、「何に我さへさる言の葉を残りけむ」と指している例が、また「やまと言の葉」という形だが、桐壺巻に、「伊勢貫之によませ給へる、やまと言の葉をも、もろこしのうたをも」という例がある。
- (6) 『源氏物語大成校異篇』によれば、「いとみじ」の部分、別本の因冬本のみ「いみじういとをし」とある。この場合、更衣が帝を気の毒に思いつたことになって、更衣の心情は単純明快になるが、本文事情としてはこれに依れない。
- (7) この点については、西木忠一氏「女もいとみじと見奉りて」小考『滋賀大國文』13、昭和五十年十二月、に論がある。
- (8) なお、帝の詞中の「おくれ先だたじと契らせ給ひけるを」からも、更衣が和歌的世界に移入する一つの契機を得た可能性がある。というのは、源

氏物語の「おくれ先立つ」の語には桐壺帝の詞と同様に、親密な者同士が時を經ず他界することを願ひ、来世へもともに契る例が目立つのだが、

(夕霧が病床ノ柏木ニ) 後れ先立つ隔て無くこそ、契り聞えしか、  
いみじうもあるかな。(柏木)

やゝもせば消えを争ふ露の世に後れ先立つほどへずもがな(御法)  
われも人も後れ先立つほどしもやは経む、なごうち思ひけるよ。(椎本)

これと同じ発想が、「おくれ先立つ」の語ではないが、源氏物語以前にも和歌の世界にあったからである。

人の世の思ひにかなふ物ならばわが身は君におくれましやは

からにだに我きたりてへ露の身の消えばともにと契りをきてき  
(後撰和歌集哀傷・定方)

もろともにいざとはいはで死出の山なかはひとり越えむとはせし  
(大和物語百十九段)

おくれじとおもへど死なぬわが身かなひとりや知らぬ道をゆくらん  
(千載和歌集哀傷、道命法師)

先の安子中宮の歌に対する村上天皇の返歌もこれに属する。いずれも桐壺帝同様、この世に残る者のことの業である。

(9) 竹取物語、伊勢物語、土佐日記、蜻蛉日記、大和物語、宇津保物語、落窪物語、枕草子、和泉式部日記、更級日記、栄花物語。大鏡、夜の寝覚、狭衣物語、梶中納言物語をいう。

(10) 例えは、吉田金彦「助詞」『国文学』昭和五十四年九月。「長く遠く仕奉れ等之冠位上賜ひ」統日本紀天平十五年五月・十一詔、「敢ましじ止為弓辭び申」統日本紀天平宝字四年正月・二六詔、など上代の「として」の例は「とて」の意義を考える参考となるであろう。

(11) 渡辺実『平安朝文章史』一八六頁。

(12) 例えは、他に、佐藤喜代治「に」『古典語現代語助詞助動詞詳説』。

(13) 円地文字「藤壺・空蟬」『源氏物語のヒロインたち「対談」』、吉海直

人『源氏物語の視角』など。

(14) 「命生く」という言い方については以前考えたことがある。拙稿『命生く』攷一付、助詞『を』の表現価値―『文学部論集』(佛教学大) 78、平成六年三月。詳細はそれを参照されたい。

(15) よって前稿(注12参照)では、今昔物語集以後に見いだせる「命を生く」の「生く」を他動詞的に固定化していると認めた場合でも元来は、「命生く」と同様に「名詞―自動詞」の構成をもつ句の名詞に「を」を下接する言い方、例えば「眉根を多み曲がる」「名を立つ(立つは四段)」「根を絶ゆ」「かたき(敵)を付く(付くは四段)」などの場合を含めて、「を」が客語表示の「を」ではなく、基本的には「主語・述語」の関係にある句の主語に下接して主語を主体の立場から強調しているもので、その結果言外に随伴的に自発や受身さらには他動的なニュアンスを生成させているものであると解しておいた。

(16) 森野宗明『まほし』の研究『国文学』昭和三十五年三月。

(17) 鴻巣隼雄「解釈の一面から見た萬葉集の言語構造―心、身、命に就いて」『国語と国文学』昭和二十一年一月、参照。

(18) 注12、参照。

(19) この歌、俊頼髓脳には初句「みやこには」三句「あまたあれば」とあり、今昔物語集には三句「わびしき人のあまたあれば」とある。

(20) 横井孝「桐壺更衣論―『源氏物語』と『竹取物語』のあわいに―」『静大國文』32・33、昭和六十三年六月。古内宏樹「たゆたう原形質―かくや姫」と桐壺更衣―『語文』(日大) 77、平成二年六月。